

第 17 回 A A F 戯曲賞審査会レポート

一次選考 2017 年 10 月 2 日

二次選考 2017 年 10 月 24 日



審査員 篠田千明（演出家、作家）
鳴海康平（演出家、第七劇場代表）
羊屋白玉（演出家、劇作家、俳優／「指輪ホテル」芸術監督）
三浦基（演出家、「地点」代表）
（※50音順、敬称略）

司会 山本麦子（愛知県芸術劇場）

—— 去る 10 月 2 日、10 月 24 日に第 17 回 A A F 戯曲賞一次選考会、二次選考会が愛知芸術文化センター内にて行われました。

今年は全国から 89 作品という多数のご応募をいただき、選考にあたり審査員全員が全作品を読んだ上で、議論が行われました。

本来、非公開の会議ではありますが、審査員の皆さまに了承を得まして一部を抜粋してお伝えします（編集している部分がありますことをご了承ください）。

一次選考会（10 月 2 日）

司会：まず、第 17 回 A A F 戯曲賞の一次選考を始める前に、第 16 回 A A F 戯曲賞大賞を受賞した『それからの街』公演の制作状況を報告します。

『それからの街』は鳴海康平さんの演出で作品を作るにあたり、まずドラマトゥルクとして長島確さん、振付家として福留麻里さんに相談し、事前に何度か戯曲読み込みのためのミーティングを行いました。

その上で、出演者は公募で決めよう、となりまして通常のオーディション告知ではなく、「この戯曲と一緒に挑戦する仲間を募集します」という意図で「挑戦者募集！」というチラシで告知を行いました。5 月にワークショップ型のオーディションを行い、出演者やスタッフが決定。6 月、7 月に 1 週間ずつプレ稽古を行い、現在、9 月末から本番まで、愛知県芸術劇場のリハーサル室等を使いながら集中的に稽古している最中です。

A A F 戯曲賞が‘変わった’というイメージが 3 年かけて伝わってきて、公演も‘どんな公演になるのだろう’と注目していただいていることを感じています。今年の選考もよろしくお願いします。

さて今年は全国から 89 作品のご応募をいただきました。昨年より年齢も地域も更に幅が広がったという感覚がありますが、皆さまいかがでしたでしょうか。

羊屋：この前まで（札幌国際芸術祭の指輪ホテル公演等の関係で）北海道に居ただけど、A A F 戯曲賞について、「公開審査が良い」と言われたよ。

篠田：私も公開審査を楽しみにしているって言われた。



第16回AAF戯曲賞受賞記念公演『それからの街』クリエイションの様子

一つの‘パフォーマンス’として楽しんでいるみたいで、リクルートが開催している「1_WALL」の審査みたいな感じで。

読んだ印象としては、SFというか‘ポストヒューマン’が増えたなど。ロボットとか魚とか。

三浦：全体の印象として時代物が多かった。何か理由はあるのだろうか…。

羊屋：あと、原作・百人一首とか、万葉集くらいまで（テーマに選んでいる作品も）あったね。菊姫をテーマにした作品とか。

篠田：ジャンヌダルクとか、歴史のもの。

三浦：その中で面白いと思った作品ってあった？

羊屋・篠田：『イソップ物語』！

羊屋：奴隷だったイソップの事とか、いろいろ勉強したいと思っていたからびっくりした。階級、階級闘争とか、今起こりそうな事だから…。

篠田：この作品、原作、牧野大誓というのは？

司会：『イソップ物語』は、牧野大誓さんが執筆された未発表原稿『イソップ物語』を原作に、親族の吉野さんが応募された作品です。牧野大誓さんは既にお亡くなりになっていて、原作の著作権保護期間は2017年で終了、との事です。

羊屋：あと、「演劇とは？」「アートとは？」というのもあった。

篠田：時代物で日本じゃない作品はあんまり…。

羊屋：今やるのか、なぜ日本でやるのか、とか考えるよね。年齢もあるかもしれない。16歳の方の作品は3枚だったけど、気にはなった。今年話題になっていた『君の名は。』を一言で言った、みたいな。

篠田：短いけどね。高校生の頃、こういうの書いてたな一。

三浦：3枚では議論の場に挙げられないなあ。全体的に保守的になっているのかなという気もする。今の時

代を反映しているのかな、という感じ。一方で、第15回AAF戯曲賞で受賞した松原戯曲（大賞受賞作品『みちゆき』）の影響もあってコンセプチュアル・哲学的、文学な作品も数多く出てきている印象があってそれは評価すべきだと思う。

時代劇のような‘設定’に頼って書いている人はぶれずに書いている人が多くて、面白からうが面白くなからうがぶれてない、という印象。あえて‘リベラル’と言うけど、そういう作品は主張が弱くて「書く事がないんだな」という印象。毎年そうだが、今年は時代劇が多かった分、より強く感じた。「誰が何と言おうとこれで行くんだ」と言えないのが、今の時代なのかな、と。

選評の方針としては「大賞の該当者なし」は避けたいんだけど、演劇で「主義主張は置いておいて何かしなきゃいけないんだ」と言えるかどうか、それでは「目的は何なんだ」と観客からつつこみが入るんじゃないか、演劇・劇団だけのため、というのはそれでいいのかと。2年連続特別賞に深谷照葉さんの作品（『ダム湖になる村』『母系家族』）が選ばれたのは‘ぶれてない’‘書きたい事を書いている’という評価だよな。でも審査の際に、「大賞を受賞する＝演劇として上演する」という事を考えて、（自分は）『それからの街』に軍配を上げた。つまり、選ばなきゃいけないとなると、時代劇という点で「相当の覚悟がないと、これ上演は無理だよ？」という感じ。

羊屋：応募作品が審査員の思惑と合致する必要はないけど、追いかけてこしたいなという気持ちはある。そこがぶれない人はぶれないな、と。

羊屋：『自転車天国』は？

篠田：昨年、ノミネート作品として残った『Curry on a conversation』の作者の方。2作目でこうきたか！と。面白いなあ。

鳴海：最初、コンセプチュアルなのかと思ったけど、やっぱり自動筆記、意識の流れを記述した作品。

篠田：『シティⅢ』は一次選考通過させたい。

羊屋：シティというのも何がシティなのか、気になる。‘精神障害系’とあえて言うならだけど、そう呼ばれるようなキーワードが出てくる作品も多かった中で、選ぶとしたら『白痴をわらうか』かな。なぜゴドー（『ゴドーを待ちながら』）に関係があるのか、とか、こんだけ最後まで笑っているのを見ているとどういう気持ちになるのかなと思って…。

羊屋：深谷照葉さんの『町おこし』は？（昨年の『母系家族』より）出演者が減った分面白かったと思う。最後のインターホンだけしか出てこない 20 代の女性とか、「地震だ、地震だ、」で終わっていくとか…。

鳴海：ワンシチュエーションになった。

篠田：どこをモデルにしたんだろう、とか気になる事はあるんだけど…。

三浦：スタイルは変わってないんだけど構造が落ちた気がする。前までの‘どうなっているの？’という魅力に比べてこぢんまりしてしまった気がする。

羊屋：きゅっとしていい感じになったなーと思ったんだけど。『明日はparadise』はどうでした？

篠田：『明日はparadise』は、架空な感じが、設定がはっきりしている所とフワッとしている所と…うまく重ならなかった所があった。‘時制’の話ですよ。もう一回時間をかけて読んでみたい。『人間と魚が浜』

も、もう一度時間をかけて読みたい。

羊屋：（『人間と魚が浜』は）こういうタイプに手慣れている感じ。

三浦：『Now here Man』の場末感が徹底しているのも気になった。素直に書くならこれくらいでも良いかも…。

篠田：『ホールドミーおよしお』も、昨年より進んでいると思った。二次で話したいな。

——以上のような議論を経て、一次選考通過作品は下記 8 作品に決定しました。

一次選考通過作品

『自転車天国』田中瑞穂

『シティⅢ』カゲヤマ气象台

『人間と魚ヶ浜』三野 新

『Now here man』坂本 正彦

『白痴をわらうか』山内晶

『ホールドミーおよしお』山縣 太一

『明日はparadise』山科有於良

『イソップ物語』吉野摩可（原作：牧野大誓）

応募総数 89 作品、一次審査通過 8 作品



二次選考会（10月24日）

司会：早速ですが二次選考を始めます。一次選考では8作品が選出されておりますので、一つ一つの作品についてそれぞれ話をしながら、ノミネート作品としてエントリーする作品を選出していきたいと思います。ノミネート作は昨年は3作品でしたが、特に作品数の指定はありません。

『イソップ物語』について

羊屋：イソップが生きていた時代って、日本だと縄文時代。その時代の感じ。

三浦：イソップはこれまでもいろいろなモチーフになっているから目新しいものはない。アクトリアティーがあまりない、と個人的には思う。文体もあるし、読ませるという点ではプロ。ただ、今これを書く、評価する、観たいと思わせる何かがあるかというところ…。岩波文庫を読んでいるような気がする。

羊屋：話は伝記だから普通なんですよ。亡くなった方だからこのあと活躍するってことはないわけだよ。

篠田：これまでは、それ（作者の来歴）は議論に上がってこなかったけど。

三浦：最後に迷って決める時は作家への期待度で決めてきた。今これを他のと比較する基準を統一する必要はないけど。

鳴海：もうお亡くなりになっているというのはびっくり…。50年前の作品だからか、今では感じにくいプロレタリア的な印象もあり、ギリシャ神話とエジプト神話の裏返しの部分が使われているのは面白い。ただ現在の観点で読むと説明ぜりふが多い、という印象。

『人間と魚が浜』について

篠田：この写真が好き。

三浦：そういう話になっちゃうんだよね。絵画・写真とかは目の前で鑑賞した時に「何か惹きつけられる」という体験があって言葉は要らない、言葉にするのはダサい、ってなるのが一般的。それを「言葉にすることに挑戦している」という着眼点は面白いんだけど、結果的に「写真の方が強い」とってことはそこまで昇華できなかった、ということじゃないかと。

羊屋：言葉は、後半は微妙でした…。でもビジュアル

も言語として、演劇言語として考えるのか、

すごく考えられるってところまで説得はされました。

三浦：言葉が脆弱なのが残念。個人的には魚にまったく感情移入できない。でも釣りってモチーフはちょっと面白かった。鹿とか、クマとかパンダとか、哺乳類じゃないんだ、という面白さ。

篠田：（戯曲を読んで）頭の中で構成するより、「この上演どうだったのかな」とって考えちゃう。上演台本にしたことでやろうとしたことが死んじゃってるんじゃないかな…。

羊屋：上演がどうだったのかなって思うのは戯曲の審査じゃないもんね。

三浦：「読み物を読ませる」ということを前提に演劇を思考しているのか、自分の世界観や音楽・絵画・映像など他のジャンルを想定して演劇にメスを入れようとしているのか、2タイプあると思う。（自分は）文学が読みたいわけではないから、他ジャンルを想定しているのは大歓迎。しかし、既に上演していて、ビジュアルとして本もあって、上演時の写真も付与されて、となると、そもそもがこぢんまりとした世界になってしまっている。そうすると、想像を超えることがなかなかできないから言葉の強度を感じられなくなってしまっている、ということかな。

篠田：私は（戯曲を）読む時に言葉の強度で読むわけではないんだけど、（この作品は）読んでいること自体が一次体験にならずに「上演どうだったのかな」と過去を想像しながら読んでしまったのが違うんじゃないかと。読んでいる時に、今ここで起きていることをテキストなり図案なりを読みながら楽しめれば良いんだけど、上演と戯曲の関係性を想像するのは違うかと。

三浦：読書をしてる時に時間が進むか進まないかということ？

篠田：そう、戯曲を読んでも時間が「体験」になっていた。

三浦：確かに、『それからの街』は戯曲を読んでいる時に戯曲だけど譜面的でビジュアル的だし、上演を想像できた。この作品は図版というストップした、切り取られたものだから。「写真」としてのジャンルの特性という事かな？

司会：応募作品の後半に「参考図版」が添付されていて、それが作者にとって創作のもとになった「戯曲」と

記載されています。その部分が皆さんがお話している「戯曲」と上演時の「アーカイブ」の話につながっているかなと思いましたがいかがでしょうか。

三浦：あ、写真だけが送られてきたらどうだったかって事か。

篠田：全部伝えようとした事で、その体験自体のクオリティーが減っちゃったって事か…。

羊屋：想像が限定されちゃうってことかな…うーん。

『ホールドミーおよしお』

三浦：正直、昨年の方が面白かった。なんかまとまっちゃった。

篠田：昨年の応募作品（第16回AAF戯曲賞一次選考通過作品『蠢きアンドCO2』）は「自分は関係ないな」って感じがしたけど、こっちは自分が関係ある感じ。

三浦：まあレンズが広がった感はある。間口が広がった、ともいえる。

鳴海：風景が前より見えるようになったからやさしくなったとはいえる。

三浦：こういう場合ってここに書かれている文体、テキスト、この言葉が素敵かどうかの問題にしかならないから…。

羊屋：素敵じゃないとは思う（笑）。けど素敵じゃないから演劇っぽい、ぐっと刺さる時がある。

鳴海：こういう自動筆記というか、思考の流れ、かつ、ダメな感じを赤裸々に描いているのは素敵だとは思いますが…それが何かと言われるとそれ以外を感じられない。つまり上演ではなくテキストからは、書かれていることの外に広がるイメージに私はつまずいてしまう。

テキスト論的に、ダメさはかわいらしいけど、それでいいのか、という所が。

篠田：男1から始まらない、男2から始まって男3.5で終わるところとか、（同じ人のせりふだけどページが分かれていて）ここ腑分けしてるのはなんでもかな、とか…。あと1ページ1シーンっていうのも気持ちよかった。私は最終選考に残したい。

羊屋：いかようにも複雑にできる可能性というのを改めて思っちゃった。世代のことなのかな。

三浦：何を評価してるのかもうちよっと詳しく教えて。ただのブログとかツイッターとかと同じ、何の責任も取ってないダダ漏れなだけの文章に思えるけど。誰かが死ぬとか事件が起こるとか、運命に放り込むとか、そういうことが施されているなら分かるんだけど…。

羊屋：長さ短さで言うと、枕草子の現代版みたいな。小さな世界の中での下世話な話を切り取って書いている。

三浦：定型…シークエンスというか、そういう面白さは分かる。でもそれは芝居と関係あるのか、ということ。

篠田：三浦さんは芝居にする話をしているけど私は（戯曲を読んだ時の）体験を重要視してる。読んでる時、何か生まれてた。

三浦：唯一設定があるのはキャバ嬢みたいになってるけど非常に安易、フェミニズムの観点から言っても、嫌悪感を覚える。「私を見て」、という作品であればもっともっともっとダメじゃないといけないし、もっともっと痛々しいものじゃないと。事件がない、作者自体に、自分の身体に。

羊屋：そのぬるさが死よりも酷い。

三浦：それが現代日本だ、と言われるんだろうけど、



そのぬるさを評価する事はできないよ。

篠田：三浦さんは心中とか覚悟とかいう言葉を使うけど、私は戯曲を読むこととは関係ないと思ってる。

三浦：じゃあ、これを読んで何を考えるのか、読後感を教えて。

篠田：さっきの言葉を借りると、読んでて時間が流れる、タイムラインの話。1 ページ 1 ページは短いんだけど、（1 ページに 1 シーンという）空間の関係もあって流れてる時間は大きかった。読んでる時に書かれていること以上の体験ができたと思う。

羊屋：戯曲を読んで、戯曲の中で答えが出る、というのはもう現代の戯曲じゃないような気がしている。解決できない事を書いて、それをシェアするみたいな事を行っている戯曲がいいなと思っていて、その中にこれは入ると思った。

鳴海：入口と出口が一緒で、「私は変わらない、あなたが変わるのを待っています、何者にもなれない私を愛してください」という諦めというか、柔らかさ、潔さを感じる。それに対する批評的態度は感じられないことをどう評価するか。

羊屋：ここだけセンチメンタルですよ。

鳴海：政治に、宗教に、人に、興味がなくても別にいいでしょ、と読めてしまうこと、それに対する第三の目が感じられないのは、私は物足りない。そこを例えばアイロニックに書いてあれば裏返ることはある。それは三浦さんがいう事件でしょう。それが無いのが惜しいところだとは思う。

『自転車天国』

三浦：これって何も書かれてないですよ。でもなんか怖さを感じる、ただ、何もない…。

篠田：2 回目、よく読んでみました、何も無かったですね。

鳴海：何か怖さや、何かありそうな匂いはさせつつ…。

羊屋：昨年と同じ文体で出してくれた、というのは嬉しい。

篠田：昨年に比べてイメージがババババって浮かんでくる感じがあって面白いとは思ってたんだけど。

鳴海：昨年の方が支離滅裂の度合いは強かった。

羊屋：昨年は途中でほら話とかが入って来て、リピートしない怖さがあったけど、今年の作品はずっと

同じ世界同じ言葉が何回も出てきて、その度に戻っちゃう。それはこの人の魅力ではない、と思う。

三浦：書くっていう行為自体に酔ってしまっているのかな。イメージがいろいろ想像できるところはいいところ。

羊屋：この形式を続けていってほしい。

『Now here Man』

三浦：非常にオーソドックスなんだけど、ちょっと感動しちゃったな。意外でしょ(笑)。でも、つらいじゃん、コンセプチュアルな作品ばかり読んでると試されている気がして。個人的に「なんか世界観が分かる！」とかではないんだけど、一方でこういう最下層の感覚って本当はあるんだろうな、と。それを演劇っていうのは人前で見せるっていうことがニューパラダイスだよ、地獄だよっていう。

鳴海：物語としてはとても楽しく読める。ただ、それ以上でも以下でもない。

羊屋：永遠に音が続くってどういうこと？

三浦：悪魔じゃないの。日本の『どん底』みたいな。この作品だとキリスト教の資本主義の末端としての「保険」「クレジット」の問題になる。

篠田：評価するところは、悲しみを書いているということでしょうか。

羊屋：ナウヒアマン、Now here、いま・ここ、Nowhere ノウホエア に行っているのか、というのが私は疑問。ニューパラダイスがディストピアっていうのもよく分かるんだけど。

篠田：ディテールが丁寧、薬の成分とか、マリーンズの帽子かぶってるとか。

三浦：非常によく書けてるけど、ドラマツルギーしかないのが残念。もうちょっと異物になるものが一つでもあればなあ。若い人がこれを書いてきたらもう少しとがっている所が出るかもしれないんだけど…。引つかかるところがボンボンと幾つかでもあれば…。

『シティⅢ』

篠田：もう 1 回読んだら面白かったなあ。作品概要にものすごく共感する。あと、段落、シーンの頭に付いてるシーンタイトルもいいなと。

鳴海：世界観もあるし、彼の言葉で書かれていること

は評価したい。ただ、全体的な世界が終末論に依拠しすぎているのがもったいないなど。遠い未来からじゃないと「希望」が描けないという論理はわかるけれど、行為や思考を支配している終末感がある種の類型であることは否めない。設定は未来や終末だとしても、類型的な終末は利用せずに書けたんじゃないかなと感じた。

三浦：文体がある、世界観がある、けどちっちゃい。丁寧に正直に、書けることを書いていることは好感が持てる。設定自体がちよっとあれで、悪い意味で無垢。素直と表裏一体なんだけど。これも毒がないと言ってしまえばそれまで。

羊屋：愛の賛歌をうたってるなーと思ってて。素直。

『明日は paradise』について

羊屋：架空にしよう架空にしようとして、凄いなというのは分かったんだけど、何も起きてないと思いました。

鳴海：架空であるからこそその良さは感じられない。

三浦：この長さ、よく書いたよね…作家として体力がある。ただ、二人芝居で持つと信じてるところはちょっと甘い。二人芝居だけど人物の設定が途中で飛ぶから構造は工夫してるんだけど最後が面白くない…。

羊屋：写真かが出てきている時点で「こうなるな」ってなる。楽しんで書いているな、とは思うんだけど。

鳴海：消費される物語に留まってる。

『白痴をわらうか』について

羊屋：私は『白痴をわらうか』を最終に残したい！

篠田：こんだけ（最後まで）笑うの、私はやらないな一つて思ったの。途中から意味がなくなっちゃって、読み飛ばしちゃう。

羊屋：私は『ゴドーを待ちながら』とかどうでもいいと思って読んでたんだけど、軽い躁状態から入って、読むにつれてその空間が想像できて、そこにずっと「居てくれる」という感じが爽快だった。女性二人だから同性愛っぽいところも。チェコの映画の『ひなぎく』を想像させられた。あれはパーティーの裏側で革命が起こっている。裏の世界が感じられて「広いな」と思った。

三浦：『明日は paradise』は男女、しかも兄弟だから典型的で幼い関係になる。こっちは女女だからちょっと違うんだよ、そこは魅力。いい意味でおしゃべりなんじゃない？軽い、軽やか。でも「世界の終わりが始まった」とか絶対口が裂けても言っちゃだめなんだよ…。

羊屋：軽い文体はわざとでしょう。「世界の終わり～」はもうろれつが回ってない、くらいの感じで読みました。

鳴海：黒電話とか、出てくる物がアイコンである以上の力を持てていない。外側が見えるものや、もっと多角的に外を感じる何かがあればと思うけど、アイコンとしての電話だけでは届かない。

篠田：履歴が見えない様に黒電話、とか設定過多なの



がなあ…。

羊屋：ちょっとそういうフェチがあるのかな。

山本：‘白痴’という言葉に対して、劇場内で差別的な用語ではないかという話がありました。その部分はいかがでしょうか。ウェブサイト等では「差別用語とされる語がタイトルに含まれていますが、内容にはそのような意図は無いと判断し、作者の原タイトルを尊重して掲載しています。」という注釈を載せています。

作者からは初演では『idiot』というタイトルで上演して、応募時にこのタイトルに変更したという記載がありました。

三浦：ドストエフスキーの『白痴』もあるし、文学的にもよく使われる表現だから、それは注意書きを付ければ問題ないのでは。

鳴海：『idiot』の元タイトルを『白痴をわらうか』に変えたことが内容と合致しているか、という点が気になるね。

羊屋：「わらうか？」ではなく「わらうか。」だから良いのでは。

——以上のような議論を経て、二次選考通過作品は下記5作品に決定しました。

ノミネート作品

『イソップ物語』吉野摩訶（原作：牧野大誓）

『シティⅢ』カゲヤマ気象台

『人間と魚が浜』三野新

『白痴をわらうか』山内晶

『ホールドミーおよしお』山縣太一

公開審査会 12月17日（日）17:00～

愛知県芸術劇場 小ホールにて

 **A A F 戯曲賞**
The drama competition by the Aichi Arts Foundation

**戯曲？
とは？
何か？
公開審査会！**

つづきは12月17日（日）の公開審査会へ！